



南極

第4号

平成12年7月20日

南極倶楽部会報

すこし昔の話

平山善吉

戦後の暗い気持ちを吹き飛ばしてくれたのは、何といっても『富士山の飛び魚』こと、古橋の連戦連勝の世界記録樹立のニュースではなかったろうか。そしてこの頃、日本山岳会はマナスルに遠征隊を送り、これまた明るい話題を提供していた。このような中で、私達山岳部の学生は『俺達もいつかはヒマラヤへ』という夢をいだいて、一生懸命山登りに励んでいた。

我が国が南極に観測隊を送ろうという話は、この頃のことである。私達は夢中になってこの話にとびつき、どうしたら南極に連れて行ってもらえるだろうかと話し合っていた。当時南極は観測隊ではなく、探検隊といわれた時代である。マナスルには学生の身分では無理としても南極に行く頃には何とか大学も卒業できそうだし、若干の希望も持てる年令に達していた。南極に関する資料の乏しい中、北極遠征の本をむさぼり読んだのもこの頃である。

さて、第一次南極観測隊 予備観測隊といわれていた は、昭和31年秋の出発だが、その2年位前から、いろいろの準備に入っていたよう

である。訓練とか、準備の様子が私達の心をかき立てていた。こんな頃(昭和29年冬)私達は富士山で大遭難を起こしてしまった。いわゆる新雪雪崩による事故で、日大8・東大5・慶応2計15名の痛ましい遭難である。

この事故の搜索と後始末のため、毎日富士山に通うような生活の中で、東大山の会の人達と知り合うようになった。これらの多くの人達とは、後に南極で再会することになるが、そのうちのボスは鳥居先生、朝比奈先生、兵力さんに、後に黒幕といわれた山上さんなどである。村山さんはマナスルに行っていた

私が大学4年生(昭和30年)になった頃、南極は大きく動き始めていた。隊長には永田先生が、そして副隊長には西堀先生が選ばれ、設営の実務は鳥居先生がやられていたようである。あるとき設営の手伝いの応募が出され、全国から山岳部の人達が集められた時など、北から南まで、名だたる山岳部の猛者達が、上野の学術会議に、あたかも職安に集る失業者のように指名されるのを待ったのである。

何から何まで初めての経験であり、何も無い中で始まった南極への準備は、

西堀先生の言葉をかりれば『創意工夫や』という時代であった。こんな中で私は最年少の隊員として、設営一般という変な担当を命ぜられ、主として建築学会で設計する建物の設計の手伝いと、鳥居先生の趣味の装備の研究と調達に従事した。

建物の設計では、当時学会長をされていた設計委員長の二見先生から『建物は岩の上に建つのか、氷の上に建つのか決めてくれないと設計はできない。永田君に聞いてきてくれ』といわれたのである。私がおそろおそろ永田先生におうかがいをたてると『そんなこと俺にもわからん。どっちにでも建たなければ困る』と、おこられたのも懐かしい思い出である。

この頃の私は、鳥居先生に『日本学術会議南極専門委員会委員』という名刺を作っていた。以来その所属は文部省、国立科学博物館、国立極地研究所と変わって45年、現在でも一貫して同じ専門委員として昭和基地建物の設計に携わっている。

現在、昭和基地の建物はホテルの一室とも見まがう立派なものになっている。そしてその技術は、世界に冠たるプレファブ技術として我が国独自のプレファブ建築を創りあげた。しかし、新しい建物が築られる度ごとに、現場からは重すぎるといわれ、住み方からはもっと良くしろと、いつも両者のハザマでハムレットの思いに悩まされている。間もなく昭和基地も半世紀を迎える。第7次の再開を前に、私達は新

しい昭和基地を東京復興になぞらえ、現状で増改築するのか、それとも遷都で美しい都市に生まれ変わったブラジリアを目指すのか、当時の若い人達と語り合った時のことをなつかしく思い出している。 (1次夏・設営、2次夏・建築装備、3次冬・建築装備)

昭和基地を知らない隊員

吉田基二

「昭和基地を知らない希少価値の隊員」と、いささかの負け惜しみをこめて自称している。ピセット、漂流、西堀越冬隊収容、越冬断念といった次第で、昭和基地に足を印することができなかつた。そして「犬を置いてくるとは何事か」と2次隊は丸ごと大叩きに叩かれた。

苦難の端緒は1957年の大晦日から2週間続いた大アラシであった。1月13日ようやく晴天になった。松本船長は早速、氷状偵察に飛んだ。「宗谷」は関東平野ほどの大氷盤のトリコになっていた。船長は「氷量15、接岸120%不可能」といった。氷盤と共に西へ西へと流された。「氷状に大きな変化がない限り、大氷盤が湾の西岸にぶつかって崩壊するのを待つより仕方がない」(船長)という状況であった。

そのころ、留守家族会では南極本部から「宗谷は1年分の水と食糧を持っており、氷の圧力を受けても氷上にせり上げる構造になっているから心配はない」という説明があったそうだ(女房

の話)。「船ごと越冬」という最悪の事態も想定されていたのかもしれない。

1月31日、「宗谷」は徹夜で氷海脱出に骨身を削っていた。2月1日未明、氷盤にぶつかって左舷プロペラの羽根一枚が折れた。重松機関長によると「氷海航行能力は30%減」。"病艦"にムチ打って砕氷を続け、6日午後ようやく外洋に出た。船内には「宗谷」の病状について胃ガン説と胃カイヨウ説があった。永田隊長は胃カイヨウ説だった。

救援のバートンアイランド号の先導で、再び氷海に進入した。氷状は一段と悪く、昭和基地から100キロほどの所で立往生となった。小型機「昭和号」によるピストン輸送で、とにかく西堀越冬隊11人は「宗谷」に収容した。最終便が帰着した時には、バ号からも大きな拍手が起きた。

西堀隊収容と併行して第2次越冬隊送り込みに、昭和号によるピストン輸送計画が練られたり、雪上車による氷上輸送が試みられたりしたが、実を結ばなかった。外洋に出ても、空輸による越冬隊送り込みが模索された(越冬隊は当初の20人からすでに7人に縮小されていた)。結局、2月24日の「越冬断念」となった。

犬の件について、西堀さんは「第2次越冬隊が成立した時、すぐ役に立ち、最も力になるのはカラフト犬やからな」と越冬1年の体験をふまえて解説してくれたのだが・・・。

第2次越冬は幻となり、15頭は残

された。南極観測草創期のショッパイけれども懐かしい思い出である。

(2次夏・報道)

第2次隊での観測

柿沼清一

新聞によると私の担当は「地磁気・夜光・極光・地震・宇宙線観測」となっていた。「たくさん観測するんだな」と冷やかされたが、担当したのは、この中の地磁気観測である。

出発までの準備は、地磁気観測で越冬する小口先生の教室で行っていた。当時は何でも持っていこう。材料さえあれば現地で作することもできる。観測用の器機を手作りするのは当たり前という時代でもあり、予定の梱数を気にしながら出来るだけのものを詰め込んだ。箱積みにした器材を梱包会社に運ぶ。振動に弱い器械は特殊の梱包をしたりしたので、全体の容積は予想より相当大きなものになっていた。この荷物がすべて宗谷の船倉に収まったときは、本当に万歳をしたいくらいであった。

数ヶ月後、氷海で、この荷物と格闘することになるなど夢にも思っていなかった。

宗谷の出港は盛大であった。その余韻も覚めやらぬ間に船上観測の準備を始める。日本から南極までの地磁気観測である、通称、金魚と呼ばれるプロトン磁力計のセンサーを船尾から数10m流して観測する。この金魚がひ

弱で、金魚の腹によく海水が溜まる。信号が取れなくなるので数人の人に手伝ってもらい引き揚げて修理する。夜中に故障が発生したときは、寝ている人を起こすのは気の毒なので一人で時間をかけて引き揚げたこともある。ローリングの大きいときなど、ここで海に落ちたら誰も気がつかないうちに鮫の餌かなと思いつながり引き揚げていた。インド洋ではその鮫の歯が金魚のプラスチックの中に食い込んでいるのを見て、鮫の餌が現実的になり恐ろしくなった。

暴風圏を過ぎ、氷海付近で金魚の観測はお休み。帰りまで金魚の顔を見ないで済むと思っていたが、宗谷は昭和基地の北東250kmあたりから待機の状態になったため、再び金魚の出番となり氷上で観測点数を稼いだ。

宗谷の待機が長引くにつれ越冬計画も縮小され、越冬に必要な器材は最小限にすべしという命令である。地磁気観測に必要なギリギリの器材を船倉で仕分けし、何時でも出せるようにしておかなければならない。小さなハッチを開け梯子を降りて船倉に入る。梱包された荷物の山は不気味にさえ感じる。この中から必要なものを取り出す。頑固な梱包と、東京で何でも詰め込んだのを恨めしく思いながら荷物と格闘していた。

船倉の中で聞こえるのは海氷と船体の擦れるザザザーという音だけである。この音で船が前進しているか、後進しているのか、止まっているのかの見当

がつくようになった。

宗谷はバートンアイランド号の援助で昭和基地から120km付近に接岸し、氷上に荷物が降ろされる。地磁気の器材はそりに積み込まれ雪上車輸送する計画である。しかし、状況はきわめて悪く雪上車輸送は中止され、そりに積まれた器材は船倉に逆戻りした。

越冬計画は一段と縮小され、地磁気観測もその計画から外れた。その時の小口先生の顔は今でも忘れられない。選にもれた若い科学者が隊長に繰り返し直訴したという話をあとから聞いた。それが誰だかは知らないが、南極地域の観測に夢を持って準備してきた科学者が何人もいたのであろう。

2月24日、本観測を断念。宗谷は日本に向かう。金魚は再び海に放たれ観測を開始した。往路と同じような経過をたどりながら東京湾口付近で観測を終了する。

第2次観測では船上観測が唯一の観測成果であったが、私にはすべてが観測成果といえる。（2次夏・地磁気）

初めて南極へ旅して（第4次）

島崎里司

昭和34年9月16日付け発令から引越し、10月31日の出港までの1か月半、ヘリコプターの領収、物品の積み込み作業など、慌ただしい初航海の不安が、早くも出港当日の船酔いとなって現れた。他人には見せられない苦しみを味わいながらも、11月12

日シンガポールに寄港する頃には漸く
船内生活にも慣れ、周囲を見回す余裕
が出てきたようだ。

航海中に犬塚隊員（朝日新聞社）が
指揮する“オンチコーラス”に入り、
夕食後のひととき「赤とんぼ」などの
童謡の合唱に、童心にかえって熱唱し
たのも大いに効果があり、シンガポ
ールでの日本人倶楽部の招待時に、その
成果を披露できたときは得意であった。

忘れられないのが初めて冰山を見た
とき、なんともいえない感動を覚え、
夢中でカメラのシャッターを押してい
たのが今でも鮮明に脳裏に焼き付いて
いる。

氷海に入り試験飛行、空輸準備OK
となるも、大晦日から昭和35年の元
日にかけて厚い密群氷に阻まれ、総員
新年のあいさつもお正月気分が出ない
ままオビ号の救援を受けることになっ
た。

オビ号を追って大利根水道に入り、
船上から第1便が飛んだときは、これ
からが我々の本番だと気を引き締めた
のであった。

その時のオビ号は、ソ連機が昭和基
地へ飛来する時の航空燃料（ドラ缶
30本？）を空輸する目的があったの
で、我々はこの機会に出来るだけ多く
空輸しようと思死になった。

一息ついた非番の時、「雨ちゃん」こ
と雨森整備士と澤田整備員の3人でオ
ビ号を訪問し、ピアノがあるサロンで
オビ号乗組員と写真を撮ったが、オビ
号の大きさに驚いたものである。

その後、数回の空輸作業の中で2月
3日に物資と共に初めて昭和基地へ飛
び1泊することができたが、その時体
験した入浴が忘れられないものの一つ
だ。

夢中でやった空輸作業1か月余、2
月18日にベル47とS-58を格納
したのをもち、極地での航空科の作
業は一応終わった。

帰路の暴風圏は荒天が続いた。記録
によれば最大右38度、左29度にも
なったとのことで、船酔いのため安眠
できず、食事にも満足に摂れなかつた苦
しみは、最大の仕事が終わった安堵感
からだったのか。

前年ケーブ出港から2か月余、よう
やくケーブに戻る。静かな街と人懐こ
い人達、食事に出た新鮮な野菜と果
物など全てが懐かしく、如何に体が要
求しているかが分かった。

翌日には航空ガソリンの陸揚げ、S
-58の完全被覆作業を終え帰国時ま
での万全の処置が完了。街へ出て子供
のお土産にと、玩具のピストルを買っ
たら箱に小さく「MADE IN JAPAN」
とあったのはお笑いであった。

ケーブ出港後、印度洋上で囲碁・将
棋・キャロムゲームなどの大会が行わ
れ、大いに楽しみ大きな慰労になつた
と思う。

この頃、沖縄へ寄港することが決ま
り4月16日から18日まで滞在、戦
跡巡りや買い物にでかけ（米ドル1ド
ルづつ支給・レート360円）大歓迎
（サイン攻めなど）をされたが、当時

沖繩にいた“裸の大将”こと山下清画伯の影が薄くなったとか。

昭和35年4月23日東京港日の出棧橋に着岸して、173日間の業務を終えたのである。（4次宗谷・航空）

馬小屋

星合孝男

かつて豚を昭和基地に持ち込んだ隊があった、という話を聞いたことはあるが、馬小屋とは何のことだ。多くの方はこうおっしゃるだろう。何のことはない。1960年4次隊が建ててオーロラ棟と呼び、1998年39次隊が撤去した建物のことで、8次越冬の時、松田武雄さん、六峰咲年さん、筆者、そして井上浩三さんの4人が住んだ“居住棟”である。前3名が昭和5年の午年生まれ、井上さんがひと廻り下の午であったから、鳥居隊長（この方も午）ははじめ何人かが、面白がって“午小屋”と呼んだ。ごく内輪の呼称である。

4次隊員でもあった吉田栄夫さんからは、当時のヘリ、シコルスキーS58に積むために、この棟の梁を宗谷で切断し基地で溶接したこと；それでも40m²になる筈の材料が運びきれず、この棟が23m²であることなど、往時のご苦労をよく聞かされたものである。

4人の居住区は書架とベニヤ板で仕切られ、出入り口には緑のカーテンが吊り下げられている、といった体のもので、誰かがウイスキーをコップに注

ぐと、トクトクという音が聞こえ、よし「俺も。」と誘惑に負けたものである。

暖房には御法川の暖房機を使い、軽油を焚いた。朝、点火、不在時には種火とし、就寝時には火を落とした。建物が狭いせいもあってか、部屋はすぐに暖まったが、冬の夜にはベッドの下に置いた、防火バケツの水が凍るほどに冷えた。ベッドと言っても、穴をあけたら、厚い板の四隅をパイプで支え、その上に畳を置いただけの寝台である。だが寝具を畳の上に延べれば、そこは快適な巣となった。

ある日、ベッドに敷いてある畳を抱え込んでいる、気象の川口貞男さんと通路で擦れ違った。「どうしたの？」発電棟で干すんだ。」成る程、畳の裏が人形に湿っていた。気象棟には観測機器が入っているから、夜も暖かなのだろと考えた。そして、念のためにと自分のベッドの畳を剥がしてみた。私の畳の裏も人形に湿り、しかも凍っていた。翌日、私も畳を抱えて発電棟へ行ったこと、言うまでもない。盛んな新陳代謝、二人とも若かったんだと、今はなつかしく思い出す1960年代末の昭和基地である。（8次冬・生物）

南極トラ騒動

森田 衛

1. はじめに

昨年暮れの南極OB会の席上で村山さんから年が明けたら「オングル」亭で南極倶楽部の発会をするからお誘

いをうけ、また久松君からも日時・場所など教えて頂いていましたが、当日都合悪く失礼しました。その後4月に場所が麹町の「桃山」に、また開催日が第3木曜日に変更とのお知らせを受け、5月から参加、139番の番号を頂きました。当日は村山会長ご旅行中でお会いできませんでしたが、第13次でご一緒した名古屋の五味貞介さんほかなつかしい方にお会いでき楽しい一夕でした。本誌を借りまして厚く御礼申し上げます。早速会報担当の神田先生から、なにか思い出など書けとのこと、約30年前を思い起こして拙文を書いてみました。ご一読いただければ幸甚に存じます。

2. 南極支援室勤務

1971年(昭和46年)2月1日付けで護衛艦「もちづき」艦長から南極観測支援室に13次「ふじ」副長予定者として転勤するや否や北海道網走の湊沸湖に飛び、ヘリコプターの冬季訓練に参加、2月中旬東京に帰ってからは、第12次の「ふじ」が正月からマラジョウジナヤ沖氷海で難航、右推進翼1枚折損、2月10日から砕氷航行を再開、昭和基地沖定着氷縁付近よりの空輸作戦でどうにか必要物資の輸送等を行うというきびしい実状を知り、過去の氷海行動の実績をデータに基づいて研究、併せて13次行動の運航予算の獲得についてのお手伝いもしておりました。

3. 13次南極行動のあれこれ

12次は必要物資の空輸が予定より

も遅れ3月16日終了、東京へ5月4日着。それから次の行動に備えて入渠整備をし、乗員の交代、リフレッシュ訓練などを行い、11月25日晴海発南極へと旅立ちました。12月16日フリーマントルを出港して間もなく、艦長宛に「トラガ3ピキオツカラ、ユックリユックリセイ」という面白い電報が内地から届いたのでした。この電報の発信人を艦長はじめ士官室の者誰も知らず、恐らく夢の中かなんかで不吉なことを感じて親切に知らせてくれたのでありましょう。11次・12次の氷海行動が難航した後なので、2度あることは3度あると、世間でよく言われているから、用心するに越したことはない。この電報を囲んで士官室の出した結論は「これから航行する暴風圏で虎のような猛烈な低気圧が3つ来襲するから、低気圧をじっくり観測して、ゆっくり、ゆっくりと航海せよ」というアドバイスであろうということでした。

暴風圏にトラおらず

昔から「吠える40度」「狂乱の50度」と船乗りには恐れられていた暴風圏でしたが、このときの航海では遂に予期していたトラのような猛烈な低気圧に遭遇せず、小虎程度でした。小虎といっても動揺は左右20度から25度ありました。期待したトラの出現が暴風圏でなかったため、定着氷縁沿いの航海に移ってから、トラとは今後の低気圧か・氷状の悪化または船体・機関・航空機のトラブル、或いは人身事故の

発生かもわからないので、副長として乗員に細心の注意を払って行動するように喚起しておきました。ところが、12月24日クリスマスパーティで騒いだその真夜中(といっても白夜)に舵故障発生、引き続いて26日には主機械のディーゼル発電機のスーパーチャージャー用タービン軸が焼き付き、この修理が27日完了したかと思うと、その日にまた主機械ガバナーのギヤーとギヤー軸が折損する事故発生。ギヤーの予備品はあったが軸の予備品がなく、鉄の丸棒を旋盤で工作して、なんとか運転できるようになりました。正規の材質でないので、いつまで運転できるか不安だったので、予備をもう1本作成、氷海行動をどうにか切り抜けることができました。これらの一連の事故が第1のトラだったと思いました。
* * さて第2のトラは? * *(つづく)
(13次ふじ・副長、15次16次ふじ・艦長)

父の思い出

松本和子

「父の思い出を何か」との有りがたいお申し出を受け、原稿に向かっております。

父は'80年1月5日に没し、早21年に成ろうとしますが、思い出話に耳を傾けてくださるのも、あの南極の大事業に携われた人間であったことの役得だと、深く感謝しております。

父が43歳で始めて南極へ向かった

1956年当時、観測事業の主力は20~30歳代の若者だったと記憶します。実は当時の私は、その皆様が、ひどく“おじさん”に感じられるほど幼く、事業の偉大さも、重要さも無縁でした。今思えば勇敢な、本当に日本の宝・頭脳とも言うべき方々の身をお預かりして、無事前人未踏の地へお送りするという難事業でした。経験も文献も頼りなかったあの時代、父と一心同体で命懸けで働いてくださる方々と、この任務を負い当地へ赴いた父の心境は、今となっては問う術もありません。しかし、その事を思うと感無量で、今でも心が波立ちます。

父の思い出話をとのことですが、家での父はまったく仕事の事は口にしない、特に末っ子の私などにはどんな事があったのか、何を思案していたのかも、分からずじまいでした。

思い出される南極に関する父の思い出は、ほんの少しばかりですが、ほとんどは“お土産”についてです。父は出港が近づくといつも無口になる私に決まって、「カズ(私の事です)土産は何がいいか?」と問い、寂しがっている私の機嫌を取ってくれました。第一希望はいつもペンギンでしたが、これは実現しませんでした。そのかわりに、よく葉書に短文を書き寄港地から送ってくれました。いまではこれは私の宝物です。寄港地ケープタウンには、シルバーリーフという“幸運”の葉を茂らせる木があり、その押し葉がついていることもありました。中には枝を

折って夥しい押し葉を家族へ送った方もあったとか。残してきた家族に対する思いが伝わりました。帰国後、父の机から扇のようにこの葉を幾枚も貼った葉書を見つけました。あまり葉が多すぎて郵送できなかつたのでしょうか。無口な父もやはり他の方と思いは同じだったと感じました。もう一つの忘れられないお土産は、第2次隊当時、救援に馳せ参じてくれたロシアのオビ号の船長から頂いた、大きな人形です。家族の話がやはり出たのでしょうか。あの時代、つましい生活の我が家では絶対に手に入らない(と私が感じた程)素晴らしいものでした。得意の絶頂ともいえるほど嬉しく、父のカブも上がりました。しかし後年その経緯を考えると、父はどのような気持ちでそれを見ていたのか...胸が苦しくなることがあります。

お土産以外で、やはり忘れられないのはあの2次航海で船が氷で囲まれ身動きが取れなくなった時のことでしょう。毎日の新聞一面に、“宗谷”が見渡す限りの真っ白い氷原にポツンと立ち往生している写真が目に入り、幼いながら何か大変らしいと感じていました。しかし、不思議な事に、あの時少しも父に危険が迫っているという不安はありませんでした。父は何時も、「行くゾ！」と言葉少なに家を出て、そして数ヶ月もいなくなり、そして必ず戻ってきたからです。父は“私達のところへ必ず帰る”、これは自明の理でした。その絶対の信頼が、幼いが故に出来た

当時の私の、最大の親孝行だったと思います。情け無い事にあれ以後、あれ以上の孝行をしたという記憶がありません。帰ってきた父はやはり、私に取って何時もと変わらない、言葉少ない父でした。

昨年11月の第41次隊出港のお見送りを、久し振りにさせていただきました。周囲には、発足当時と変わらぬ見送り風景が繰り広げられ、五色のテープと記念写真、音も無く巨大な艦船が離岸していきました。

現在では、Eメールも電話も南極と通じ、何時でもあたかも隣にいるようにコミュニケーションできます。それでも、父や家族を南半球に送り出す寂しさは、今もどの御家庭でも同じです。港には、若いお母さんやお子さん達が多く見受けられました。皆様は昔も今も、ご家族と共に任務を果たされ、其々の御家庭の思い出を横糸に、南極観測を縦糸に一糸づつ紡いでいかれるのだと感じました。

いつまでも、皆様のご壮健でご活躍されますように、お祈りいたします。

(元“宗谷”船長 松本満次 次女)

水・洗濯・下着(つづき)

三田安則

「みどり」開店の11月14日の南極新聞への投稿。「これは便利だ・南極老人 サル又の巻 サル又を洗濯に出すことを禁じられ、お困りの向きもあるようだが、何のことはない。サル又

をはかなければナヤミはたちまち解消する。頭とナントカは使いようで切れる」原文のまま。観測隊員の投稿と推察されるが、隊も船も思いは同じであったようだ。

『この後続く水対策は極地まで持ち越され、皮肉なことに、最も心配されていた極地で、水の問題は解決されたとは私は思っている。更に皮肉なことは、氷海に進入しなかった(出来なかった)随伴船海鷹丸(水産大・練習船)が最も水に苦しみ、気の毒な状況にさらされた船だと思う。改めてその苦闘を称え感謝の意を捧げたい。』

昭和31年11月27日 シンガポール出港。

昭和31年11月28日 山本航海長、初めて公式に南極新聞紙上で隊員・乗組員に節水呼び掛け。「東京出港以来再三節水をお願いしてきたが、現在の消費状態(東京～シンガポール1日平均13トン、1人当たり100^{リットル}以上)これは計画の2倍にあたり、極地での行動に支障を生ずる恐れあり」

昭和31年11月29日 正午スマトラ北西端付近、間もなくインド洋に入る。渡辺兵力副隊長、節水についての航海長の意見と根本的には同意見であるという前提で若干の提案を……<に始まり>宗谷の給水能力420トン(これは真水満載量)からすれば、今日までの消費実績(1日13トン)で止まっている限りケープ迄は水不足は起こらない。<けれども>暑いイン

ド洋では、ある程度水を豊かに使う方が、広い意味の保健上からいってもむしろ妥当……水の消費慣習を一気に改めるのはなかなか難しい……強制的に給水統制で量を決める事ができても、そのことによって一人一人の能力が低下しては本来の目的に反する。節水を無理なくやれる自信と経験を得ることが大切ではないか。ケープ迄節水の統一的管理は行わず、全員が自発的に協力……<ということ>で2～3の具体的方法提案>『船上生活の不慣れな者の多い隊として、善意はあってもその方法を知らないために、出来ない場合も少なくない』我々が温帯・寒帯圏で1日7トン程度の消費で楽に出来るようになれば、恐らく大丈夫であろう。ケープ出港迄に容易にその水準に達し得るだけの能力を持ちたい。(一部省略)

昭和31年12月29日 ケープ出港、いざ白い大陸目指し。山本航海長、シンガポール～ケープタウン間は1日平均10トンという実績、今後、入浴を3日に1回とする。

昭和32年1月11日 パック外縁突入準備、偵察航行。山本航海長、真水の消費量、ケープ出港以来本日迄1日当たり消費量9トン、計画量を上回っている。

昭和32年1月12日 入浴日変更、今後5日に1回とする。(つづく)
(1次～5次宗谷・航海)

- 極地本散策 -

《やまとゆきはら》に想う

サンフランシスコ平和条約は、1951（昭26）年9月8日に署名された。条約の第2章「領域」の第2条で、日本国は(a)朝鮮、(b)台湾、(c)千島列島並びに樺太、(d)国際連盟委任統治の太平洋諸島、(f)新南群島及び西沙群島に対するすべての権利、権原及び請求権を放棄した。ところで第2条(e)には「日本国は、日本国民の活動に由来するか又は他に由来するかを問わず、南極地域のいずれの部分に対する権利若しくは権原又はいずれの部分に関する利益についても、すべての請求権を放棄する」と書かれている。

平和条約の最終草案全文が朝日新聞に掲載されたのは、調印の約3週間前、8月17日の朝刊であった。8月25日の天声人語には週刊朝日「講和會議特集号」（9月2日号）の『マ元帥と白瀬中尉 - 講和条約草案秘話 - 』に載った白瀬中尉の次女、武子さんの手記が紹介されている。それによると、白瀬中尉ご自身が昭和21年6月頃にマッカーサーに手紙を出され、南極領土は今後どう扱われるかなどを訊ねられた。マッカーサーからは「即答はいたしかねるが講和条約の時に然るべく考慮しましょう」との返事があったという。週刊朝日の記事では、この第2条(e)がマッカーサーの回答であったと書かれている。

袖井林二郎著『拝啓マッカーサー元帥様 占領下の日本人の手紙』（1985

大月書店 / 1991 中公文庫）に「白瀬中尉の娘の手紙」がある。掲載されているのは、白瀬中尉が亡くなられた昭和21年9月から3年を経た昭和24年に白瀬武子さんがマッカーサーに出された手紙である。そこには、白瀬中尉の手紙に対し「南極の件は探検して得たものの所有である」という返書があり、白瀬中尉が感激して『南極記』をお送りしたところ、この大事な記録書は一時貸して下さったのか、それとも戴けるのかとの問合わせがあったことなどが記されている。

マッカーサー連合軍最高司令官は、朝鮮戦争の発言によって、平和条約調印の5か月前の1951年4月に、トルーマン大統領によって解任された。4月16日、帰国の元帥機は太平洋上で来日するダレス特使の飛行機とすれ違った。ダレス特使は羽田で記者団に無線による洋上空会談を披露した。

児島襄著『講和条約』（1996 新潮社第3巻 / 1998 中公文庫第11分冊）によれば、「南極地域のすべての請求権の放棄」は最初の米国草案にはなく、英国草案に書かれていたのが最終草案に盛り込まれたとなっている。

歴史に若しはないとよくいわれるが、いくつかの「若し・・・」を考えたくなる話となった。袖井氏によると、白瀬武子さんの手紙はマッカーサー記念館に所蔵されているが、白瀬中尉がマッカーサーに宛てた手紙そのものはまだ見つかっていないという。その手紙が発見されて、白瀬中尉の手紙とマッカ

ーサー元帥の返書とが並べて公開される日が来ることを夢見て、その日を心待ちにしたい。

(小野延雄、3次夏・海洋)

白瀬南極探検記念館に
KD605を訪ねる会

日時：平成12年10月19日(木)～
21日(土)

会費：3万円(東京発着バス代、宿泊、
食事代他)

貸し切りバス予約のため、7月10日で
申し込みを締め切りましたが、他の交
通機関で行かれる場合は8月末まで
ご連絡下さい。

連絡先：

観測隊：

西部 XXXX-XXX-XXX

神田 XX-XXXX-XXXX

宗谷：

三田 (勤) XXXX-XX-XXXX

ふじ・しらせ：

久松 (勤) XXX-XXX-XXXX

- 新入会員 -

会員番号 / 氏名 / 〒 住所 / / e-mail

137 古川 晶雄

138 福谷 博

139 森田 衛

140 藤井 正規

141 松原 廣司

142 金戸 進

143 青柳 直大

144 浅尾 深八郎

145 宮岡 宏

146 福嶋 泰夫

147 竹下 正敏

148 鈴木 孝久

149 練木 允雄

150 鈴木 つる

151 吉川 暢一

152 清水 弘

- 編集後記 -

第4号をお届けします。本会報は年
4回(季刊：秋、冬、春、夏号)です
ので、本号でちょうど1年分が発行さ
れたこととなります。会員の皆様の協
力で、いつも予定頁を越える盛況さ
です。次の第5号は10月19日(木)
発行予定ですので、投稿締め切りは9
月18日となります。奮ってご投稿下
さい。編集に関する連絡先：神田啓史

Tel:03-3962-4590;

Fax: 03-3962-5743;

e-mail: hkanda@nipr. ac. jp